松本健一

青春の断端

白地社

松本健一

青春の断端

まつもとけんいち
松本健一

1946年　群馬県前橋市に生まれる
1968年　東京大学経済学部卒業
1969年　旭硝子㈱船橋工場勤務を辞める
1973年　法政大学大学院（近代日本文学専攻）中退

著　書『若き北一輝』（現代評論社）『北一輝論』（同）
『孤島コンミューン論』（同）
『革命的ロマン主義の位相』（伝統と現代社）
『風土からの黙示』（大和書房）
『歴史という闇』（第三文明社）
『ドストエフスキイと日本人』（朝日新聞社）
『竹内好論 一革命と沈黙』（第三文明社）
『評伝北一輝』（大和書房）
『思想としての右翼』（第三文明社）
『時代の刻印』（現代書館）

青春の断端

一九七七年十二月三十日　初版発行

著者　松本健一
発行者　土岡　忍
装画　人見承門
印刷所　藤井印刷所
製本所　清水製本所

発行所　白地社
京都市右京区太秦西野町一八―八
電話（〇七五）八七二―一二二六
振替京都　三四三六七
郵便番号　六一六

乱丁・落丁本はお取りかえいたします

青春の断端／目次

わが偏屈なる旅　6
歴史の欠落　10
口籠りつつ　18
忘却の蔵　26
喰うことについて　34
賭博の悲哀　42
わが拠点の構築　50
旅にある愁ひ　62
格子なき牢獄　70
原初の光景　78
亡国の音　86
ある夜の記憶　94

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongboo

海の近くで　102
夏の或る旅立ち　110
生きざまの真実　118
ひとりの作家の死　126
荒れ家にて　134
光る霧氷　142
刀傷と駅鈴と　150
雪の日の断章　158
無名者の碑　166
めぐりあい　174
わが低空飛行　182
想い遙かに　190

山都びとの印象　198
夏の疲れ　206
高山彦九郎の坐像　214
接触における火花　222
幻の滝　230
わたしの中のひとつの時代の終りに
——あとがきにかえて

青春の断端

わが偏屈なる旅

維新元勲の出身地というのを、わたしはどうも好きになれない。それはもしかしたら、わが家系がこういう元勲に何ら関わりがないことの裏返しの感情、つまり劣等感に発する嫌悪の情であるのかもしれない。かといって叛臣賊軍に関わりがあったというのでもない。正系でも異端の系譜でもなく、早い話が馬の骨だったということである。

そんな馬の骨の末裔からみると、長州萩のごとく、軒並み有名人の家であるような町はどうも気色わるい。それも家々がだれの旧家ともしれず朽ちこぼれているままならよいが、やれ吉田松陰の塾跡だとか、やれ伊藤博文の生家だとか、仰々しく書き記され、保存されているさまをみるにつけ心が沈んでくる。

それゆえ、できることならこういう町に旅をしたくはない。地殻の表層を一枚はがしてみると、そこに歴史の意外な貌があらわれてくる、そんな貌をみたいがために、わたしは旅をする。べつに

シュリーマンを気取っているわけではないが、かれのごとく生きてみたい、とはおもう。そしてついには、みずからをもその地殻の表層のもとに埋ずめてしまいたい、というのがわたしの秘かな希いである。

いつのころからか、わたしはじぶんの好む人物たちが写真を残したがらなかったことに気づきはじめていた。安藤昌益に写真がなかったのは江戸中期のこととて是非もないが、かれはその顔ばかりでなく生の痕跡をさえ明らかにしなかった。維新の元勲のなかでは、西郷隆盛ひとりが写真を残さず、肖像画も死後の想像画があるばかり。中江兆民の写真は生涯に四枚。北一輝のそれは死刑執行まえの記念写真をふくめてわずかに六枚ほど。そして狩野亨吉に写真は何枚あるかしらぬが、じぶんの生きていた跡をとどめるのはいやだと、写真をとるのを極度に嫌ったといわれるから、その数はしれよう。

いずれも人間社会への関心は異常なほど強いが、己の生は一回性のものと考えたせいだろうか。死してのちなお名をとどめよう、とはいささかも考えなかった。そんなかれらに心ひかれるほどであるから「歴史の町」（これはディスカバー・ジャパンによってつけられた標語である）萩にいって、心楽しまなかったわたしの位相もある程度わかってもらえるかとおもう。

長州萩には余儀なく出かけたのだったが、薩州鹿児島には一度すすんで出掛けてみたいような気もする。その誘因のひとつに、こんなことがある。わたしの姉の友人に、益満さんという美人がいた。背はそれほど高くないが、顔だちが小さく整い、そのころ思春期だったわたしの心をさわがせ

てやまぬ女びとだった。

ところが、つい今年（昭和四九年）の正月、なぜかその名まえが気にかかり、姉に益満さんの家はどこで、どんな家だったのかと尋ねてみた。それは、西郷隆盛の部下で、相楽総三とともに江戸市中を混乱させる役目をはたした男が、益満休之助といったこととの関連を考えたからである。

姉の答えは、かの女は鹿児島のひとで、家は大きな布団（ふとん）屋を営んでおり、その祖父さんというひとが鼻の高さを別にすれば天狗のような厳（いかめ）しい顔をしていた、というものだった。とすれば、かの女が益満休之助の末裔だった可能性もあるわけだな、すくなくともその遠戚ぐらいにはあたるのかもしれない、祖父さんの顔が天狗のようだったというのもじつに意味深重だな、などとわたしはひとりごちたことであった。

鹿児島にいってみたいという気がするのは、この推測を実際にたしかめてみたいからである。いや、その美人に逢いたいからだ、とひとはいうかもしれぬ。しかしそれは邪推というものである。というのは、かの女はもうずっと以前に他処へ嫁してしまっているからである。むろん残念なことではある。

さて、鹿児島に心ひかれるのには、もうひとつの因がある。十年以上もまえになるが、わたしはさるラーメン屋で手伝いをしていた。本格的につとめていたわけではなく、手伝いと交換に三度の食事をさせてもらっていたのであった。この店で、わたしはおおよその中華料理をつくる方法を学んだのである。技術とまではいかぬ。店は二年ほどのちに、引越すことになったからである。

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongboo

引越先は鹿児島であった。東京駅で寝台車にのりこんだのは、かれら夫婦と子供ふたりの計四人。見送り人はわたしひとりであった。夕方の四時ごろのことで、すぐに夕食の時間がせまっていたからであろう。かれらは駅弁を五つ買った。そしてそのひとつをわたしにくれた。

帰り道、かれらが鹿児島で開く小さなラーメン屋のことを考えながら、公園のベンチで駅弁をたべた。冷たかった記憶がある。維新元勲の出身地があまり好きでないわたしが、鹿児島に行ってまず最初に訪れるのは、かれらの小さなラーメン屋であるかもしれない。

歴史の欠落

関東大震災のあとや大東亜戦争敗戦のころ、人工の夾雑物は脆ろくも崩れおち、瓦礫の東京の街から海がみえたという。その海はたぶん、森鷗外が観潮楼と名づけた屋敷からみえた海と同じ海であったろう。このことを顧みるとき、風土を失ないつつある現代人にとって、こんど海のみえるのはいつのことだろうか、などという終末論的疑問がふと涌きおこるときもないではない。

たしかに近代文明の浸透とともに、風土はわれわれの眼前から消えていった。自然的風土を滅ぼすことが人間の支配を顕現する指標のごとく思われた時期さえあったのである。それが一瞬の天災あるいは数年間の戦争によって脆ろくも崩解したとき、つまり焼跡のむこうに海をみたとき、近代の脆弱さをこそ悟るべきだった。しかし近代の進歩幻想は、海はもちろん、その瓦礫の山をも蔽い隠した。

ひとは文明の底に埋もれる風土を透かし視るべきである。なぜなら、そこは己の出自であるから

だ。出自を忘却した発想はついに状況を後なでするだけである。それは近代の病弊を根源的に剔抉しないし、とすれば近代の奈落を切開する道をさし示しもしない。

おそらく、失いつつある風土を眼前につきつけられたとき、ひとは己の心臓を抉りだされたように愕然とするはずである。これを極めて鮮かな手際でしてみせたのが、保田与重郎の『日本の橋』ではなかったろうか。彼は「日本の橋」という風土をかりて、日本の抒情の美しさを謳った。それは川端康成の『美しい日本の私』などは及びもつかない構成を伴っていた。つまり、彼は風土を抒情の対極にあるものとしてではなく、風土の美を抒情の美へと昇華させていたのである。

保田の方法は極めて巧みである。それを保田の詐術といってもいいくらいだ。なぜならかれはそこで一切の歴史を捨象したからである。すなわち「私はここで歴史を言うよりも美を語りたいのである」と。この保田の詐術を看破したものがほとんどいないのは不思議なくらいである。

さてしかし、歴史と無縁な風土というものは存在しないのである。風土は現世における人間の生きざまの凝縮であると云い換えてもよい。つまり、保田のように、風土から歴史を捨象してその美を語ることは、風土に対する冒瀆にちかいのである。保田の言葉が歴史におけるイロニーであることは、かれ自身が一番よく知っているのである。

思うに、歴史すなわち人間の日々の営みと切り離された美というものはないのである。美は非日常性の領域に属しているなどと詭弁を弄してはいけない。非日常性の領域もまた人間の営みの部分なのだ。人間とはそういう危ふいものであり、その影の領域をも含めた日々の営みのうちから、美

は創られるものである。たとえていえば、海を日常的に眺めているものにとっては、そこは生活の場である。憧れの対象としてより、嫌悪と怖れの対象でさえあるのだ。そのことは風土を日々の営みとしての歴史から切り離して解釈してはならないということである。歴史の欠落はかならず不必要な美化をまねく。三島由紀夫は日本刀を賞でたが、これに対してキム・ジハは想像力でこう斬込んだのだ。「どうってこたあねえよ／朝鮮野郎の血を吸って咲く菊の花さ／かっぱらっていった鉄の器を溶かして鍛えあげた日本刀さ」と。かれは三島における歴史の欠落を看破ったのである。文学は仮構をこととするが、仮構とは歴史を無視することではなく、現実（史実）を素材として、内部世界をその素材に仮託することである。

実例をあげて検証してみよう。最近「孤島論」を手がけているせいで、島と本土の位相を扱った作品のみが目についた嫌いはあるが許されたい。『青幻記』（一色次郎）、『海を畏れる』（若林真）、『鼠どもへの訴状』（佐江衆一）についてふれることにする。

『青幻記』はもう五年もまえの作品である。最近、成島東一郎の手で映画化され、それを観た機会にもう一度読みかえしたのである。この作品については、『映画批評』の九月号で詳しく論じておいたので、ここでは簡単に触れるだけにする。舞台は奄美列島の沖永良部島であり、「青き幻」と化した母の姿を追い求めて、二〇年ぶりにその島を尋ねてゆくというだけのストーリーである。この場合、南島という風土は大和との関係において歴史を凝縮しているのである。それゆえ、筋としては単なる母を恋ふる記にすぎない物語は、南島の歴史的運命のうえに重ねられるという結果をも

つのである。つまり、母は大和で病を得て離縁されるが、それは南島が常に大和によって利用され切捨てられてきたことと重なりあう。あるいはまた、子が母を求めて彷徨する図は、大和が魂の故郷南島へ回帰する図と重なりあう、ということである。いわば『青幻記』では、風土はそのまま歴史を漂わす主体となっているのである。作者はそのことによりかかっているのである。

さて、『海を畏れる』は佐渡ケ島を離れて本土で自生する知識人の根無し草的不安を扱ったものである。先にわたしの好奇心のほうからの見方を述べると、この小説は私小説に近いのではないだろうか。若林真というひとはそれが本名であるなら、若林玄益つまり作中の山田玄斎の末裔にあたるはずである。北見一星すなわち北一輝の師であった若林玄益の末裔の小説としてみれば、登場人物のいくたりかはわたしにも見当がつく。作中に語られる作者の佐渡ケ島での話もほぼ事実に近いにちがいない。そこには私小説的自叙伝ゆえのまがいもない真実性、つまりひとが一生に一度は書ける生涯の記録的臭いがただよっている。そしてまた、それがこの小説の欠点でもある。

過去の記憶を呼びさます佐渡ケ島の因習や風俗やらは、いやらしいがそれだけに迫真性をもっている。それは作者の実感に支えられている。これに較べると、現在のフランス語教師の状況はきわめて曖昧で不たしかである。それはなにも現代の知識人の立場の曖昧さではない。作者自身の現代状況の捉え方の不たしかさに原因している。それが小説的結構として、現在と過去、本土と故郷、疎外と土着という類型的対比しか生みだしていない。それでは現在の疎外状況の超克が見出せようはずもない。この小説は作者にとって生涯に一度しか書けないテーマだろうが、それだけでは次の

小説は書けまい。

それはさておき、この小説のテーマになっている根無し草的知識人と確たる風土の対決は、現代における迷路の脱け口をさぐりあててはいない。なぜなら、ここに描かれた風土はその歴史を十全に表象していないからである。風土に潜む歴史を汲みあげきれぬことによって、不たしかな現代を切り拓く道をさし示しえないのである。それゆえ、主人公は確たるけれどもいやらしい故郷を逃れたものの、行く方途もなく都会をさまよわねばならないのである。

この『海を畏れる』に較べれば、まだ連載中ではあるが佐江衆一の『鼠どもへの訴状』は出色である。佐江の小説をいままであまり気をつけて読んだことがないので、他の作品と比較するわけにはいかない。もちろん、この小説には美文調に流れたり感情過多の点もあるが、それにもかかわらず、最近興奮をさそった作品である。

これはトカラ列島の悪石島を舞台にしている。この島の神役の出である男が本土でやっと課長補佐になって、年老いた母を東京の養老院にいれようと妻子をつれて島にくる筋立てになっている。ちょうど島ではテレビ中継塔をたてるかどうかという問題で対立がおこっていて、かれらはそれにまきこまれるのだが、その争いが島の歴史そのものの流れの中で捉えられており、みごとな世界をつくりあげている。そこには『青幻記』のような夢幻としての風土も、『海を畏れる』のような過去形としての風土もない。そこには歴史として現代が描破されており、歴史の結晶としての風土が存在しているのである。

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongboo